



いのちの水

二〇一四年

六月号

六四〇号

イエスは、人里離れたところに退いて祈っておられた。

(ルカ福音書5の16)

目次

- ・道 5
- ・聖なる風の吹くとき 2
- ・私たちが受け継ぐもの 4
- ・主の祈りと聖書 5
- ・集団的自衛権と平和 16
- ・お知らせ 7月～8月の
各地での集会予定 17

道

この世は、さまざまの悪きもの、毒麦の生えて来る荒れ野である。さらに、うるおいをもたらす水の流れていない荒野、砂漠のごときである。

しかし、そこに道を備えるお方がいる。荒野の道にうるおにある命の川を流れさせ、その道のかたわらに水をたたえた池をも備えてくださるお方である。

正しい道を歩みたい、苦難の道は歩みたくない。楽しく誰とでも仲良く、しかも平和に歩んでいきたい。等々、多くの人はこの世で生きるとき、道を歩むということと関連して思い起こす。

生まれたときから、病気や障

がいなどで、寝たきりとか歩くことも困難、あるいは耳が聞こえないとか見えないなど、特別な重荷を負ってこの世の道を歩いていくことを強いられる方々もいる。

また、人生の道の途中で、突然の事故や災害で、それまでの幸いで平和な道が突然消え失せて、涙と苦しみの道を歩かざるを得なくなった方々も多くいる。

そのようなあらゆる人たちに、聖書は本当の道、永遠に壊れることのない道を指し示している。

神はさまざまの意味におけるこの世という荒れ野にあつて、いかなる状況にあつても道を示してくださるお方として聖書で示されている。

このことが、最初に聖書で鮮やかに示されているのは、現在のイラク地方、ユーフラテス川の河口に近いところで神からの呼びかけを受けたアブラハムにおいてである。

彼は、生まれ故郷から、1500キロ以上も離れたような遠く、未知の場所へと行くことを命じられた。彼が途中に遭遇するであろうさまざまの危険や困難にもかかわらずその呼びかけにこたえて旅立ったのは、まさに道なき荒野に道を備えてくださる神を信じたからであった。

神を信じて、み言葉に頼って歩みを始めるときには、道はおのずから備えられるという真理がここで示されている。

神は、荒れ野に道を備えるお方であることは、次のような箇所でも明確に記されている。

：呼びかける声がある。主の

ために、荒れ野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。(イザヤ書 40 の 3)

この声は、いつの時代においても、霊的な耳を鋭くしている人には聞こえる声となる。神はそのような人を必要なくに起こされる。

預言者そのものが、道を備えようとする人たちであった。

神ならぬものを神とし、武力や富、権力欲にまどわされた人たちがあふれる荒れ野の状況の中で、命がけで、神の道を示し、語り続けた人たちである。

そして、それから五百年ほど後にあらわれた洗礼のヨハネは、キリストのために道を備えるために召された人であった。

そして、歴史上で最大の道を備え、かつ新しい御国への道を開いたのが、キリストである。

る。

そのキリストは、人々に真理の道を教えることによってその道を備え、さらに、道そのものでもあった。

わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。(ヨハネ 14 の 6)

そして道であるとともに、いのちの水を流れさせるお方でもあった。それは、次のイザヤの預言の成就でもあった。

見よ、新しいことをわたしは行く。

今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。

わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に川を流れさせる。

(イザヤ書 43 の 19)

老年になって、若いときには

想像もしなかったさまざまの苦しみ、試練―病気や孤独、体の不自由、施設などの生活の困難等々が次々と襲いかかってくる人が多い。そのただなかで苦しんでいる方々のなかには、もう生きる道がない、と深い悩みにある方々もあることだろう。

そのような人生の最後の段階における道、その茨の道ともいえる道をも導いてくださるのは主イエスのほかにはない。私たちは、その歩む道の延長上に死というものがあるのを知っている。しかし、それは宮沢賢治の「銀河鉄道之夜」の最後の部分で現れるまっ暗なものとしてみえ、感じていく人も多いだろう。

けれども、聖書の世界においては、いかなるものも、死すらも、キリストの備えた道を阻むことはできない。

死という巨大な壁をも貫いて

いる命の道であるからだ。
聖なる風の吹くとき

自然の音、そして私たちの耳に聞こえないが霊的な耳を持っている人には、聞こえる音や声がある。聖書に表れる人たちは、とくに後者―神からの語りかけをはっきりと聞き取ることができた人たちである。

また、物理的な音とは別に、霊的な耳に聞こえる響きというのもある。

話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくとも、その響きは全地に

その言葉は、世界の果てに向う。(詩篇 19 の 4-5)

自然界の音で、最も重々しく、意味深い音として、私はすでに子どものときから、大きな松の木に風が吹くときの音―松風の音に心惹かれた。

それ自体としては単純な松の葉、それが数知れず集まって風に吹かれるとき、なぜあのような不思議な重厚ともいえる音が生み出されるのかと、聞き入ったことがよくある。

小学校の近くに、名勝とも言われた堂々たる松並木があった。それは数百年を経たと考えられる巨木で、学校の帰りに、はるかに見上げるほど高くそびえた松で、風が吹くともいえない音がするのだった。その風格ある姿と松風の音楽は、60年を経た今も心に浮かびあがる。

今日では残念なことに、それらの松はすべて枯れてしまった。わが家のある山の松の古木も同様である。台風が近づいたとき、山の頂上まで登って誰一人いないそのところで松の古木たちの奏でる音楽に耳を傾けていたものだった。

風にはこのような肌を感じる

ものがある一方で、目に見えない風、肌にも感じないし、周囲の木々からも音を出さない風がある。その風のことは、聖書においてもその巻頭に記されている。

神が天地を創造したとき、闇と混沌があったが、そこに吹いていたのが、神の風であった。原語のヘブル語では、風のことをルーアハというが、それは、人間に見られる「風」——息という意味にも使われ、息が止まると死んでしまうことから、命の根源——霊という意味にも使われるようになった。

新しい英語訳の重要なものにおいては、このことを「聖なる風」、あるいは「神からの風」などと訳しているのがある。

この聖なる風は、旧約聖書ではその後、エゼキエル書には、神の霊と風を重ね合わせるように記されている箇所がある。

神からの風が吹きつけることによって枯れはてたものが生き返るといのである。(エゼキエル書37章)

地上を吹く風によってさまざまな樹木は音を奏でるが、聖なる風が私たちの心に吹きつけることによって、沈黙せる自然であっても語りかけてくる。

あるいは、聖なる風が周囲の自然界や、人々に吹きつけるときには、そこからの声、賛美が響いてくる。

そのような声を聞き取ったからこそ、次のような詩が生み出された。

…主を賛美せよ

雪よ、霧よ、み言葉を成し遂げる激しい風よ(*)

山々よ、すべての丘よ、

木よ、杉の林よ…(詩篇148の8-9より)

(*) 原文は、ルーアハセアラー

(セアラーは大風の意)。新共同訳では、この箇所では、この二語を風と訳しているが、別の箇所(エゼキエル書13の13)では、暴風と訳し、その箇所を、新改訳では、激しい風、口語訳では、暴風と訳している。

こうした詩篇では、人間に對してと同じように、自然のさまざまなものに対しても賛美を呼びかけている。

人は、神に對して賛美できる存在だからこそ、詩篇ではしばしば、主を賛美せよ、(ハレルヤ!)と賛美が呼びかけられている。同様に、自然のものも、霊的な耳を持った人には賛美できるものだとして示されているからこそ、このように、人に対すると同じように、賛美を呼びかけられているのである。

無生物というが、それは単に私たちの固定観念に過ぎないのであり、死者をも生かす神の霊、聖霊によるときには、それらもある種の命をもった存在として浮かびあがっていく

るのである。

私たちが受け継ぐもの

この世では、受け継ぐ―相続ということは大きな問題になる。場合によっては、数千万円という巨額が得られる。そうでなくとも、安住の地や、財産が得られる。

相続がなければ、貧しく、苦しい生活となるという場合もある。

そのため、ひとたび遺産相続となると、肉親でも醜い争いが生じ、かつてはやさしかったと思われた人物が豹変することもある。

そして、この世の策に長けた人間が多く相続をえることがある。

しかし、そのようにしてもぎとった財産によって新たな問題が生じることも多い。

主イエスが言われたように、この世の宝、財産は、虫が食

い、サビが付くし、盗まれることもある。そしてそれらは、天の国へと持っていくことができない。

これに対して、私たちがだれでも求めることによって相続することができものが聖書では示されている。

：主ご自身が、あなた方の相続地である。(申命記10の9)

かつてイスラエル民族は、目的の地に着いたときに、それぞれの地を与えられた。これは、神から与えられたものであり、彼等が神の御手のうちにあるもののうち、目に見えるじつさいの土地を彼等に与えたのであった。

しかし、神と人との仲立ちとなつて人々の罪を赦し、また神からのメッセージをつたえる祭司たちは、そうした土地を受けることがなかった。

それは、目に見える土地でな

く、見えない神ご自身が彼等の相続するもの、分け前なのであったからである。

このような考え方は、やはりキリストを指し示している。キリストの弟子たちは、この世の職業を捨てて、主に従った。この世の受け継いだ仕事や報酬を受け継ぐのではなく、イエスに従うことによって神からの報酬を受けとることになった。

そのことはとても重要なことであるので、新約聖書では繰り返し記されている。

：人の子が天使たちを従えて来るとき、羊飼いがひつじと山羊を分けるように彼等をより分け、ひつじを右側に、山羊を左がわに置く。そして主は、右側にいる人たちに言う。父に祝福された人たち、天地創造の前からあなた方に用意されている国を受け継ぎなさい。(マタイ25の31-34)

：この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。(エペソ1の14)

：心の目を開いてくださるよう。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。

(エペソ1の13)

：悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです。

(ペテロ3:9)

私たちは、何かを受け継いでいる。遺産子によってそれは私たちの願いや希望とか関係

ないものを受け継いでいる。遺伝子の本体はDNAである。いくつかの種類の分子(*)の長大な配列の仕方によってさまざまな能力が規定されている。運動神経、音楽の能力、知的能力…等々。病気になるやすい性質、ある種の病気等々も規定されている。

(*)デオキシリボース(五炭糖)とリン酸、それとアデニン、グアニン、シトシン、チミンの四種の塩基など。DNAとは、Deoxyribo Nucleic Acid(デオキシリボ核酸)の頭文字を取った略語。

そのようなものを、私たちの意志と関わりなく受け継いでいる。

しかし、それと全く対照的に、やはり私たちの意志とは関わりなく、神の一方的な恵みによって受け継ぐものがある。それが神の国である。そのことを知った者は、これは神様の一方的な選びであると感じるであらう。知りもせず、望みもしていなかったもの—

かも最も価値高いものを受け継ぐようにしてくださったのである。

けれども、そのような選びにも関わらず、他方では自由な意志で選びとることもできる ようになっている。

アダムとエバは、エデンの園という理想の場を与えられていたにもかかわらず、自らの意志で誘惑を受け入れ、楽園を追い出されてしまった。

神がアダムとエバの息子のカインに言われたように、「罪が戸口で待ち伏せており、お前を求めている。お前はそれを支配せねばならない。」

(創世記4の7より)

「この言葉にあるように、罪に陥るかどうかが、その逆に、祝福を受けとるかどうかが、人間が選びとるという側面も聖書では同時に記されている。

神の国を受け継ぐようにと選ばれた人たちであっても、背き続ける自由な意志も同時に

与えられているゆえ、背きをし続けるときには、神の国を受け継ぐことはできなくなる。キリストによって選ばれたはずのユダもそのような人であつたと考えられる。

信仰を続けられているということは、その選びがつづいていくことであり、神の国を相続財産として受けることができるということになる。

この相続財産こそは、虫も食うことなく、盗まれず、またいつさいの財産や権力、健康、地位も関係がない。

一人一人があたかも神の長男であるかのように、貴重な神の国の霊的財産を受け継ぐことができるのである。

：キリストによって私たちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされた。

(エペソ書1の11)

この御言葉にあるように、私たちは神のご意志により、その御計画にしたがつて前もって御国を受け継ぐ相続者としてくださったのである。

この驚くべき恵みを与えられたと知った者は、この特別な恵みをどこまでももち続けていきたいと願う。

主の祈りと聖書

今日は、「主の祈り」の意味と、それが聖書全体とどう関わるかをお話ししたいと思います。

初めに「祈り」ということについて。

誰でも追い詰められると、別に神を信仰していなくても祈ります。例えば飛行機がハイジャックされたとき、思わず祈ったと言います。しかし、猫や犬は決して祈りません。

犬は賢く、警察犬や盲導犬などに使われていますが、祈ったりしません。賢いサルでも祈るといふことはありません。善悪の観念もないのです。

しかし人間は祈ります。これは人間の奥深い本質と結びついていると考えられます。祈る気持ちに近づくほど、より人間らしくなると言えるでしょう。人間は、誰でも本当に苦しい状況に追い込まれたとき祈りたくなり、祈るのです。

「主の祈り」をイエスさまはどういう訳でこれを教えられたのでしょうか。ルカ伝11章1〜4節を見てみましょう。

：イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。

「祈るときには、こう言いなさい。父よ、御名が崇められますように。…」

なぜ弟子の一人がこう質問したのでしょうか。苦しいときには誰でも祈ります。病をいやしてください、あるいは、食物がないときに食物を与えてください…等々。

そのような自然に生じる祈りは弟子たちもしていたし、神を信じていないような人でもそのような祈りの気持ちになるものです。

しかし、弟子がとくに祈りを教えてくださいと願ったのは、そうした誰でも子どもでも信仰のないものもしているような祈りでなく、最も神の御意志にかなった祈りはどういう祈りなのかを尋ねたと考えられます。

元気な者も病気で寝たきりの人も、死が近くなっても祈る

祈り、黒人であっても白人であつてもできる祈り―すべての人ができる祈りを、ここでイエスさまが教えたわけですから全世界で今も祈られるこの祈りの意味をこれから探してみたいと思います。

主の祈りは次のようなものです。

：天におられる私たちの父よ御名があがめられますように御国が来ますように

御心が天に行なわれるとおり、地にも行なわれますように。

私たちの日毎との食物を今日も与えてください。

私たちに罪あるものを赦しましたように、私たちの罪をも赦してください。(＊)

私たちを誘惑に遭わせないで、悪から救ってください。

(マタイ6の7〜13、ルカ11の2〜4より)

英訳の主の祈りを初めの部分だけあげておきます。各種の英訳もほぼ似たような訳です。

Our Father in heaven,
hallowed be your name,
Your kingdom come.
You will be done, on
earth as it is in heaven.

(＊) hallowed..聖とされるように(hallow 聖とする、清める；尊敬する、神に献げる。holyと語源は同じ)

「天におられるお父様」とまづ祈れと言われました。父という者は厳しい、なじみにくい存在です。旧約でも、アブラハムでもモーセ、あるいはダビデや預言者たちも、神様のことをお父様などとは言っていないません。神は霊的な存在であつて、全能の神として礼拝の対象であり、正義の神であり、罪を見抜き、裁きの神として恐れられていたのです。

が、「お父様」と呼びかけることはありませんでした。

日本では何でも、人間でも動物でも神様にしています。しかし、タヌキなどの動物や山を御神体としていたり、秀吉を神とまつっている神社に行つて「お父様」などとは言いません。

主イエスは、旧約聖書の時代とちがつて、神を、最も身近な存在を象徴的に表している「お父様」と呼ぶようにされたのが、旧約と大きく変わった点です。

「御名が崇められますように」一般の日本人にとつて、この表現はその意味が分かりにくいものです。御名とは何か、なぜそれが崇められるようにと祈ることがそれほど重要なのか……と。

しかし、独特の重要な意味があるのです。御名つまり神様御自身が崇められますように

ということですが、日本語の「崇める」とはニュアンスがかなり違うのです。

翻訳するとどうしても、別の原語には訳しきれないものが残ります。例えば、英語の home ホーム(＊)と日本語の「家」とは大きく異なっています。英語のホームという語には「心」というのが深く関わっています。

日本語の「ふるさと」も単なる場所でなく、心とつながっているのと似たところがあります。「英語のホーム家庭と訳して、ようやく原意の半分を表しているにすぎない」と内村鑑三も述べています。(＊)

ホームにあたる言葉はドイツ語にもない、ホームという語には独特な温かみがあります。日本語の俳句や短歌を英語にしようとする、まるで違った感じになりますね。ですから、原語を知ることが大事なのです。

(＊)故郷・母国 家庭 棲息地、自生地、本場、中心地……。これらの意味の奥に流れているのは、心の故郷、中心となるところといったニュアンスである。それゆえ、Men make houses, women make homes. (男は家を作り、女は家庭を作る。)

(**)「外国語の研究」内村鑑三信仰著作全集5巻 182頁 教文館

「崇める」という言葉で思い起こされるのは、学問的な世界では最高はノーベル賞です。スポーツではオリンピックの金メダルをとったりすると、人々は英雄のようにそれこそ崇めます。マスコミでも大々的に取り扱います。

しかし、この主の祈りにおいて用いられている「崇める」と訳されたギリシャ語は、「ハギアゾー」で、「聖とする」ということです。しかしまた、「聖」という字も漢語ですから、中国人の考え方を反映しているのであって、聖書の意味とは部分的にしか共通していないのです。この漢

字は、「耳の穴がよく通って聞こえる」と説明されています。(貝塚茂樹著の漢和辞典)特に、人間を超えた存在からの、あるいは真理の語りかけを聞く耳を持つ者を聖と考えたことが分かります。

しかし、聖書のもとなつていいるのは、旧約聖書であり、それはヘブライ語で書かれています。新約聖書における「聖」という意味は、その背後に旧約聖書の意味があります。

「聖とする」というのは、ヘブル語では「カダシユ」です。このもとの意味は、set apart で、「分けて置く」ということなのです。

神様が聖である、という意味は、(私たちとは)根本的に別であり、人間世界から全く別の存在である、いかに人間世界が混乱に陥ることがあろうとも、天地の激変が生じようとも、神様は、まったく動

じない、という意味が感じられます。

それに対して、私たち人間は、たった一言ですぐ傷ついたり得意になったり落ち込んだりします。人間は簡単に影響を受けてしまいます。清く美しい花も踏みつけられたり折りとられるとすぐに消滅していきます。海や山などの自然もブルドーザーではぎ取られると、全く違った世界になってしまいます。

しかし、神様は地上でいかなることが起ころうとも、絶対に変わらない存在です。それが神であり、神は聖であるとは、そのようなことを意味しています。

「分けて置く」この事は旧約聖書の最初から出てきます。創世記2章3節に「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」とあります。

聖別したと訳されている原語が、カーダシユというヘブル語です。安息日を聖別したという意味は、その日をふつうの日とは別に、特に神のために分けて置いたということです。このように「聖」というのは、本来「分けて置く」ということなのです。

漢字——もともと中国語で、現在も使われている言葉である「聖」という文字によつて、私たちは、聖人の聖を思い出すことが多いのです。日本語では親鸞聖人(しょうにん・上人とも)などほんのわずかな人にしか使いません。中国でも、聖人とは、孔子や伝説的人物である、堯(ぎょう)・舜(しゅん)などやはりきわめてわずかの人にしか使わない言葉です。

では、聖書はどうでしょうか。聖書では、ローマ、コリント、ガラテヤ書等々、パウロの書簡には、その宛て名として

「聖徒となったローマの人たちへ」とか、「召されて聖なる者とされた人々に」と記されています。

聖なる人々とか聖徒というのは、言い換えると聖人ということになります。しかしコリント人への手紙を見ますと、いろいろと党派争いがあったり、パウロの使徒としての働きを否定して、一部の人たちが支配しようとしたとか、到底、日本語の「聖なる人々」とか聖人といったイメージとは合わないのがわかります。

カトリックにおいても、聖人というのは、歴史上でも特別な人だけに与えられる呼称です。

このように見てくれば、新約聖書で聖徒とか、聖なる人々というのは、大きく異なるのがわかるのです。これも、旧約聖書や新約聖書での「聖」と訳された言葉の意味そのものが、私たちが通常連想する、

「聖」という意味がちがっているからです。

聖なる人々というのは、聖書においては、この世から分けられた人たち、神の国のためにとくに呼び出され分けられている人たち、という意味になります。

主イエスを信じて救われた人は、神様によつて選ばれ、分けられたのです。聖という中国の字から受ける印象からは全く違います。

オリンピックの金メダルをとった人が崇められたりするのは、まったく異なる意味なのです。そのため、次のように、御名が聖とされるように、と訳している日本語訳聖書もいくつかあります。

・「あなたのお名前が聖とされますように」(岩隈直(おし)・*) 訳

・「あなたの名が聖なるもの

とされますように」

(新約聖書翻訳委員会訳―岩波書店)

(*) 日本に日本語のギリシャ語辞典がほとんどなかったときに、25年余りも費やして、英語・ドイツ語の代表的なギリシャ語辞典や文法書、注解書などを駆使して「新約ギリシャ語辞典」を完成(1971年)。多くの人たちに用いられてきた。著書に希和対訳脚註付きの新約聖書12巻、聖書講解双書10巻など。

人間は現実の悲惨や混乱などを見て、どこに神がいるかと言います。しかし、現実がどうあっても、神様は聖とされますようにと祈りなさいとイエスさまは言われたのです。つまり、これはみんなが神様のことを、この世のあらゆるものとは分けられた存在、いかなる地上の汚れや混乱とはまったく離れた存在であり、神の愛、真実は変えることがない人と人々が信じ受け取っていきますように、という祈りなのです

これが、イエスさまが教えた第一の祈りです。

このように、御名が崇められますように、という言葉から受ける意味―みんなが御名を崇めるようにとは、ニュアンスが相当異なるのです。

崇めるということは、この世では著名人とか権力者あるいはお金や特別なことを成し遂げた人に対してよくなされることで、そのような崇め方と御名を崇めるということとは、本質的に異なるもののに、同じ用語を使うことで、御名を崇めるということの意味があいまいになる可能性があります。

それゆえに、この主の祈りは、「御名が聖とされますように」という訳のほが、より原文の意味を現していると言えますし、表面的にもてはやすような崇め方とははっきりと別なのだということがよりはっきりと示されています。

「御国を来たさせたまえ」

この「国」という言葉と、ギリシャ語の意味とはまた相当違うのです。「国」と訳されていますが、原語は、バシレイア(basileia)というギリシャ語で、バシレウス(王)(basileus)から派生した言葉です。「王の権威あるいは支配」というのが本来の意味なのです。そこから、王の権威・支配の及ぶ領域―国という意味が生じたのです。

ですから、「御国が来ますように」という祈りは、この世界の支配者―王である神様の愛と真実のご支配が来ますようにということなのです。

御国とは、神様の国―天国のようなどころがきますように、という気持ちで祈っておられる方々も多いと思われます。たしかにそのニュアンスも持っています。その根本にあるのは、神の王としての愛と真実の御支配が、今、この世にもたらされますようにという

祈りです。

一人一人の心に来ていただくだけでなく、家庭やキリスト教の集会、あるいはいろいろな社会、国全体に、さらに世界に、神様の愛と真実なご支配が来ますようにということなのです。

家庭の問題では、家族の分裂など深刻です。国と国とは日本と中国、韓国は小さな島を巡る問題で対立しています。

社会問題では原発事故の時、たまたま風向きの関係で飯館村など北西方向に多量の放射性物質が飛散したが、風向きが関東方面だったらどうなっていたでしょう。日本はもはや国家として立ち直れないほどの深刻な状況になっていたと思われます。地震大国、火山大国の日本に多数の原発があることは空恐ろしいことです。

ですから、共同訳(*)でも

それを反映して「あなたの支配を行使渡らせてくださいますように」と訳されています。しかし、新共同訳では、「支配」という言葉が一般の日本人にとってある種の冷たい感じを持つていると考えられたように、また「御国が来ますように」と訳しています。

(*) 共同訳は、1978年に新約聖書の部分が完成、プロテスタント、カトリックの学者の共同作業によってなされた。岸千年、高橋虔、竹森満佐一などとともに、無教会の前田護郎も加わっていた。カトリックでは、P・ネメシエギ、Z・イエールなど、固有名詞の訳が、原語に近づけるということで、イエスをイエスス、ルカをルカス等々としたために読みにくい、また翻訳の考え方にも異論あり、新たな共同訳がなされることになり、それが現在の新共同訳聖書である。しかし、新共同訳が共同訳より全面的によいというのではなく、翻訳上での考え方の違いによるのであり、共同訳も原語の幅広いニュアンスを知るために多くの点で参考になる。これは以前からの口語訳、新改訳、岩波から出ている訳なども同様である。

確かに、支配という日本語は、

権力や武力による支配、金による支配…などのように、愛のイメージとは逆のものを感ぜさせることが多いと思われるます。

このように、聖書の訳は、その担当者の考え方、解釈、日本語に関する感覚などによって変わりますが、原語の意味は、「王である神の真実のご支配が来るように」ということです。

このように主の祈りの一つの祈りは、その意味を正しくとらえて祈ることが大切です。主の祈りを形式的に祈ったり唱えたりするのでなく、今言った意味を知って祈ることが極めて大事です。

私たちは毎日に祈りますが、朝起きてすぐ何を思い祈るかです。少しでも御国を来たらせてください、あなたの真実とご支配が来ますようにと祈れるようになりたいと思います。

御心がなされるように

「御心が行われますように」

「心」と訳してありますが多数の英語訳(*)で heart と訳してあるのは一つもありません。

原文のギリシャ語でも、心を現すカルディアはこの主の祈りでは使われていないのです。御心と訳された原語は、セレーマで「意志」を表します。英語訳ではほとんどすべて

ミ(ニ)意志)と訳されています。しかし、日本語訳聖書は、情緒的なニュアンスの強い「心」と訳しています。

(*) 現在では、40種ほどの英訳があり、その大部分を参照したが、ミ(ニ)以外の訳語を用いているのは、「THE MESSAGE」と題する新約聖書が、*Set the world right* と訳し、もう一つ *May what you want to happen be done on earth as it is done in heaven* (NIV) と訳している二つである。しかし、この訳も神の意志がなされるようにということであり、心という情緒的な意味ではない。

なお、英語の「heart」は、語源的には、ギリシア語の心を表す *kardia* カルディアや、ラテン語の *cor* と共通している。イタリア語では *cuore* (クオレ、この言葉を題名とし

た本はアミチス著で、「愛の学校」と訳された。

人間の悪い意志がはびこっているこの世界のただなかで、どうか神の真実にして正しいご意志が行なわれますように、という祈りです。その原語の意味に則して訳されているのが、次の訳です。

「あなたのご意志が実行されますように」(岩隈直訳)
「あなたの意志のままに行なってくださいますように。」

(共同訳)

そして、意志という訳語は固い感じがすると思ったのが、岩波書店から出された訳では、意思という通常あまり使われていない表現をあて、それに「いし」とふりがなを付けていて、意志と情緒的なニュアンスもある 思いという二つを表そうとしたあとが見られます。

「あなたの意思(いし)が成

りますように。」(新約聖書
翻訳委員会訳)

しかし、共同訳の「意志」という訳語では、受ける感じが固いと判断されたためではないかと思われるが、新共同訳ではふたたび、「心」と訳されました。

この世界では、人間の支配欲、権力欲、部族間の憎しみ、いろいろな欲望など、まったく人間のまちがった意志によってさまざまな争いが生じ、その最大のものが国家や地域全体が戦争になる世界大戦も引き起こされました。今日大きな問題となっている、集団的自衛権というのも、それが広範囲に発動されて、二度の世界大戦も起こってしまったのです。人間のそうしたこの世の意志は、世界の無数の人々を死に至らしめ、苦しめ、破壊に陥れるのです。
だからこそ、この主の祈り――

神様の愛と真実のご意志がなされますように、という祈りは、一人一人の祈りであるとともに、日本やアジア、そして世界全体を対象にした祈りなのです。主の祈りがほかのいかなる祈りより広く深いのはこのことを考えてもわかります。

この主の祈りについては、詳しく話すと一回だけではとうてい話しきれません。

日ごとの食物の祈り

「私たちの日毎の食物を 今日も与えてください」

アジアの貧しい国々から見れば、贅沢三昧をしているとみなされるかも知れないのが今日の日本人です。そのため、今日の食物を与えてくださいと、祈っている方は多くはないのではありませんかと思われる。日本では祈らずとも豊かに与えられているからです。そのため、ただ唱えるだけの浅い

祈りになりがちではないでしょうか。

日本では、学校給食もふくめて、残飯や食糧の廃棄が莫大な量になっていきます。(*)

そしてそれを燃やして処分するのにもまた大変なエネルギーを使っているのです。

多くの日本人は、なかなかこつ祈れないと思います。しかし、

「私の食物を与えてください」ではなく、「私たちの日毎の食物を…」であり、私たちと

いうところが重要です。私たちとは、狭い意味では家族や友人ですが、さらに日本、世界の人たちも含まれます。世界にはまともに食べられない人々が9億人ほどもいます。

また、豊かな国であっても、病気などで食事をまともにいただけない方々も多くいます。その人たちのことを思つて「私たちの日々の食物…」と祈ることの重要性を主イエス

は古くから見抜いておられたのです。

(*)日本では、食糧の廃棄量は年間二千万トン程度もある。これは、ヨーロッパの数倍とも言われる。食糧廃棄量は、一人あたり年間で、ドイツは82kg、アメリカは105kg、日本は152kg。(朝日新聞社のWEB、RONZA 2012年05月07日、他による。)これを見ても、日本が特に食糧廃棄が多いのが目立つ。農業のあり方、TPPなどの議論も大切だが、このような食糧廃棄の実態を改善することが、より基本的に重要である。

また、私たちの肉体のための食べ物のためではなく霊の食べ物のために祈ることはもっと重要です。

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ4の4)とあります。

私たちを本当に生かす食物とは、イエスが言われたように、神の言葉なのです。それゆえに、イエスさまは、私たちに日々の糧である霊の糧をくださいと祈りなさいと言われるのです。

日々の食物も十分でない人たちははるかな古代から現在に至るまで常に数知れず存在していました。そしてそれと共に霊的な食物―神の言葉を知らずに、霊的に飢えた状態の人もまた、いつの時代にも無数にいます。キリストによる救いを受けたキリスト者たちにおいて、これは日々祈りのなかから神から受けなければならぬことなのです。

口から入る食べ物がいくらあっても、それだけでは人間は人間らしく生きられません。神様から霊の糧、霊のパン、霊の食べ物をおいただきそれで満たされないと、人は傲慢になりたり人を見下したり、あるいは逆に絶望したりしてしまいます。これは貧しい国の人も豊かな国の人も皆そうです。老人も若者も、病人も健康な人も皆同じです。

こうしてみると、この主の祈り―私たちの日々の食物を

与えてください―は限りなく広く、自分もふくめ、一人一人の個人から、全人類のために祈る限りなく広い祈りだということが分かります。

罪の赦しの祈り

「わたしたちの罪を赦してください。わたしたちも自分に罪のある人を赦しましたように。」

私たちは起きた時から、まず自分のことを考え行動します。新聞を見たりテレビを見たり、また何を食べようかと食べ物のことを考えたりします。起きてまず自分中心という罪を犯す私たちです。

そうではなく、起きたらまず神様のことを思い、神様に祈るように変えられたいものです。罪を赦され、新たな力を受けないとなかなかそれがないのです。

そして、自分の罪の赦しを深く実感すると、自分も赦され

ているんだから、他人の罪も赦してください、愛することが出るようにしてください、と祈ることができます。

人間の根本問題は、神の示す正しい道―愛や真実、正義にかなった生き方ができないということです。その言葉も行いも正しくない―罪があるとすることです。その罪ゆえにありとあらゆる問題が生じてきます。

自分は。。さんから受けた不当な言葉や悪意、あるいは仕打ちを忘れられない―赦せない、といった気持ちは大なり小なり誰の心にも起こるものだと思います。それが有限り、私たちの魂の本当の前進は難しいので、主は私たちが他者のそうした罪を赦したのかどうか、をいつも問われているのです。この祈りを祈れないとき、私たちは主の言葉―あなたが他人の小さな罪を赦さないなら、私もあなたを

赦さない、祝福を十分には与えない―という語りかけを聴く思いです。

他人を赦せるためには、聖霊を豊かに受けることが必要です。聖霊を豊かに注がれるとき、私たちの心の内なる暗き部分が明るくされ、聖霊から来る安らぎ、喜びによって他人から受けた不正も、私たちの心から消えていくからです。それが赦せるということです。

それができないとき、私たちはこの祈りが難しく感じられますが、そのときには、さらにルカ福音書で主の祈りに結びつけて記されているように、聖霊を求める祈りをするように導かれます。

そしてその聖霊は、必ず真剣な求めによって与えられると約束されています。

誘惑に遭わせないように

「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪から救ってください」

以前の口語訳や新改訳では、「試み」と訳されていました。新共同訳では、「誘惑」と訳されています。これは、原語のペイラスモス *peirasmos* が両方の意味を含んでいるからです。英語訳でも二通りに訳されています。(*)

(*) ∴ lead us not into temptation (NIV)
 ∴ do not bring us to the time of trial, (NRS)

なぜ、「試み」とも訳されるのでしょうか。それは、例えば重い病気にかかり、長く続いたら、神はいないのではなにかという思いに誘惑されます。それは同時に、信仰にあくまで踏みとどまるかどうかの試験、試みのときなのです。そのようなことからわかるように、誘惑されるときは、試験のとき、テストされている時であるゆえに、このような二つの意味で使われていると

考えられます。

私たちは何らかの苦しみに出逢いそうなきには、試みに遭わせないでくださいと祈ります。そのような日常的な祈りにも用いられてきましたが、この祈りは、激しい迫害のとき、生きるか死ぬかという厳しい状況にさらされる中においても祈られてきた祈りです。

キリストを信じるだけで、捕らえられ、家族もろとも獄に入れられ、厳しい寒さや暑さ、極端に貧しい食物、不衛生、さらに拷問などを受ける苦しみは、現代の私たちの到底想像できないものです。

そつした試験に遇わせないでください、というのは全身全霊を込めた切実な祈りだったのです。この主の祈り、それは、そのようなこの世の極限の苦しみにあつてなお祈ることのできる祈りでした。

現在でも、無実の罪で牢に入れられている多くの政治犯の

人々、その人たちの内なる祈りは、やはり、これ以上の試験に遇わせず、この苦しみから逃れさせてください、神のご意志がなされますように、この苦難を乗り越える霊のパン—キリストご自身をください—等々の主の祈りがなされてきたと考えられます。

次に、「私たちを悪から救ってください」については、原語が、悪そのものの、サタンとも、悪人とも解することができ、そのため、訳も二通りにわかれています。

・ ∴ 悪い者から救ってください。(新共同訳)

・ ∴ 悪しき者からお救いください。(口語訳)

・ ∴ deliver us from the evil one. (NIV)

・ ∴ 悪から救ってください。(共同訳)

・ ∴ 悪より救いいただいたまえ
 (文語訳)
 ・ ∴ 悪から救い出してください。(岩隈直訳)

・ ∴ 悪からお救いください。
 (新改訳)

・ ∴ save us from the Evil One (NJB) 大文字を用いて、悪人でなく、悪そのものの、サタンからの救いを示している。

主の祈りは、あらゆる人のすべての状況において成しうるものであることを考えると、特定の悪人からの救いを祈るのでなく、悪人によって虐げられていない人でも、心の中に悪—サタンが入り込み、誘惑するゆえ、悪そのものからの救いを祈っていると受けとめるのがより深い内容を持つことになります。

といつのは、悪人から救われても、悪から救われるとはかぎらないからです。主イエスが自らが十字架で付けられて

殺されることを予告したら、ペテロがそんなことはあつてはならないと、こともあるように、イエスを脇に引き寄せ、叱ったことがあります。

そのとき、主イエスは、「サタンよ、退け」と一喝されたのです。このことから分るように、サタン―悪はどのような状況にも入り込むのであつて、そのような根源的な悪からの救いを祈るといのが主イエスの祈りであつたと考えられます。

主の祈りと聖書

この主の祈りは、いかなる状況にあつても、またどのような人でも祈ることのできる最も内容の深く、広い祈りであるゆえ、聖書に記されているさまざまな祈りも、この主の祈りと内的に深くつながっています。

主イエスも、十字架で処刑される前夜に、できることなら

この杯を除いてください、しかし神のご意志がなりますようにと、主の祈りに含まれる祈りをなされたのでした。

最初の殉教者、ステファノは自分を石で撃ち殺そうとして襲いかかった人たちに対して、「彼等の罪を赦してください。」という祈りをもつて命を終えたのです。その祈りは、「主の愛のご意志がなされ、彼等が赦されますように。愛の御支配が彼等に対してなされますように」という祈りであり、ここにも主の祈りが含まれていたのです。

パウロがその書簡でほとんど常に祈りをもつて始めていますが、そこでは「私たちの父なる神と主イエスからの恵みと平和があるように」という祈りがなされています。このような祈りも、信徒たちの心に御国が来る（主の愛の御支配）ことによって実現されるし、主のご意志によって実現

されるゆえにこのように祈っているのです。

聖書には最初に「闇と混沌」があつたと記されています。このような記述を神話だと思ふ人も多いのですが、神話のように人間が考え出したり、空想や想像力のおもむくままに作り上げたものでなく、神が与えた啓示であつたのです。

…初めに、神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり、神の霊（*）が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があつた。（創世記1章1～3節）

（*）以前にも記したが、ヘブル語では霊という語は、風、息という意味を持っている。そこから、神の霊とは神の風とも訳される。新しい英語聖書においても a divine wind (NB) 、wind from God (NB) と訳されている。

老年になり、病氣や事故、

孤独、あるいは災害などに出席するとき、この世には闇と混沌が渦巻いているのを痛切に思い知らされます。しかしそこに、「神の風」が吹いているのです。神が「光あれ」と言われると光が来るのです。

光あれ！という神のご意志がありさえすれば、どのような暗黒にも、空しく荒れたところにも、光が来るのです。それはまた、神の御支配が私たちのうちに臨むということです。御国が来るということです。

それゆえに、「御国を来たらせてください」「あなたのご支配を来たらせてください」と祈れとイエスさまは教えてくださいました。

さらにこの祈りは、キリストの再臨によって、いつさいの悪が滅ばされ、この世界、宇宙が最終的に新しい天と地になるという主の約束が成就しますようにとの祈りも含んで

エデンから一つの川が流れ

そのように、聖書に書いて
いることは、必ず実現するの
です。ですから、そのように
なりますようにと祈るのです。
このようなことも、御国を来
らせてください、という主の
祈りに含まれます。御国―神
の王としての御支配がなされ
るなら、私たち一人一人の魂
にもいのちの水が流れはじめ
るからです。

御国が私たちに來るときには
このようなうるわしい状態と
なると言われているのです。
それゆえ、私たちはこの主の
祈りを祈るのです。

詩篇は主の祈りの表現をさまざまに変えたものと言ってよいでしょう。

このようなさまざまの意味を内に秘めている主の祈りを――単に唱えるのではなく、毎日祈っていきたいと思います。

(2014年5月25日(日)主日礼拝講話。会場 鹿児島市牧善商会にて。これは、鹿児島聖書の責任者である古川 静氏が録音から起こして

くださったものを修正、加筆したものです。)

集団的自衛権と平和

現在の複雑な政治、社会的状況では、かつてのような平和憲法ではだめだ、憲法そのものを変える、それがさしあたり難しいので解釈を変えて軍事力でアメリカ、あるいは他国と集団で防衛するのだ、という議論がなされている。

しかし、集団的自衛権の広範囲な発動によって、二度の世界大戦も引き起こされたのであり、集団的自衛権を発動したら国が守られるなどということは決して自明のことではない。

むしろ、それによって軍事力を広範囲に用いることになり、かえって戦争の危険を広げていく。とくに今日ではテロが思いがけない方法でなされていることを考えるとき、そのようなテロに対しては、集団

的自衛権は、防衛することは困難である。

「このような時代だからこそ、そして日本はウクライナやシリア、アフリカなどの国々と異なり、民族的対立が国内にはなく、またイスラムのように、同じイスラム教徒であっても、スンニ派とシーア派で激しく対立する、そこに他国が介入するということもない。しかも、広大な海によって自然の巨大な堀となつて他国の進入からも独立が守られてきた。」

そして、太平洋戦争によっておびただしいアジアにおいてとくに中国への侵略によって一千万を越えるおびただしい犠牲者を生み出し、自国でも数百万の死者を出し、世界で唯一の原爆を二度落とされてその悲惨を徹底して他国に与え、かつ自国も味わつてきた。それは世界でも特異な経験である。

そこから、平和憲法という歴史上でも特別な憲法が与えられ、70年近くも戦争に直接的に加担することがなかったため、日本の軍事力によって他国の人を殺害することもなかったのである。

その上、かつては存在しなかった新たな重大な問題、原発が国内に50基以上あり、それらがもしテロ行為による破壊とか、ミサイル攻撃など受けたら、日本は壊滅的な打撃を受けることは、3・11のことから考えても容易にわかることである。日本は、かつてのような空襲とか、外国軍が上陸して戦場になるとか、あるいは核戦争とかにならずとも、原発への攻撃だけで日本は事実上滅びてしまう状況になるのである。

だからこそ、日本は、国防のため軍事力を発揮するという「ふつつの国」でなく、この平和憲法を守ることによって、

平和を守る「特別な国」であることを宣言し続けていくところ、自国の本当の平和、世界の平和に貢献できる道である。

とくにキリスト者にとっては、この平和憲法の理念―武器をとらない、戦争しない―ということは、聖書のなかにその淵源がある。次の言葉は今から2500年以上も昔に書かれた言葉である。人間世界のあるべき姿が、そんなにも古くから明確に指し示されているのに驚かされる。

：主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かつて剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。

(イザヤ書2の4)

こうした延長上に、キリストのよく知られた次の言葉があ

る。

…イエスは言われた。「剣を
さやに納めなさい。剣を取る
者は皆、剣で滅びる。(マタ
イによる福音書26の52)

平和を守る、平和のためと称
して軍事力を用いる、20世
紀の数々の戦争もそのような
名目で始められた。このよう
な考え方が一体どうして真の
平和に至る道であろうか。

平和憲法を守る、これは空理
空論ではない。過去から現在
にいたる世界の厳しい現実と
日本の現実を見つめるときに
日本の独自の使命は、まず、
この平和憲法を守るというこ
とに立つてそこからさまざま
の方法を考えることにある。

お知らせ

7月の北海道瀬棚での聖書集
会と、それ以後の7月～8月

の集会の予定を書いておきま
す。地域、場所はほぼ去年と
同じです。主が守り導いてく
ださなければ、できないこ
となので、主に祈り求めて無
事各地での集会がなされ、み
言葉が語られ、聖霊が注がれ
ますように、御業がなされま
すようにと祈ります。

○瀬棚聖書集会

・日時：7月17日～20日

・場所：北海道久遠郡 農村青

少年研修会館

・問い合わせ：野中信成

○札幌交流集会

・日時：7月21日(月)、休

日)午前10時～14時

・場所：北海道札幌市 北二条

クラブ

・問い合わせ：大塚寿雄

○苫小牧集会

・日時：23日(水)
・場所：苫小牧市民会館 会議
室 207号室

・問い合わせ：大澤恵美子

○青森市での集会

・日時：24日(木) 午後1

時～3時頃

・場所：青森市 岩谷宅

○山形県鶴岡市での集会

・日時：26日(土) 午前1

0時～13時

・場所：佐藤周治宅

○山形市

・日時：26日(土) 午後6

時30分～8時30分

・場所：大手門パルズ

・問い合わせ：白崎良二

○仙台市

・日時：27日(日) 午後2

時30分～4時30分
・場所：仙台市民会館 特別会
議室

・問い合わせ：田嶋 誠

○福島県本宮(もとみや)市

・日時：28日(月) 午後4

時～6時

・場所：湯浅鉄郎宅

○さいたま市での集会

・日時：29日(火)

・会場：関根義夫宅

・午後2時～4時頃

・問い合わせ先：関根義夫

・交通：「東北浦和駅東口下車、まっ
すぐ東に向かい、すぐの中山道交差
点をつ切り、そのまま道沿いに通
称「浦高通り」を5メートルほど行
くと左側に Queen's Hotel に
バスセンターがあります。そこで、
東武バス「さいたま市立病院」で、
4つ目の「瀬が崎入り口」で下車5
分です。

○千葉県大網白里市での集会

・日時: 30日午後1時~3時

・場所: 足立哲郎宅

・問い合わせ: 深山政治

○千葉県市原市

・日時: 30日午後6時~8時

・場所、問い合わせ: 土屋聡宅

○八王子での集会

・日時: 31日(木)午後1時~3時頃

・会場: 八王子学園都市センター(八王子スクエアビル11階)八王子東急スクエア

参加希望の方は、一週間前迄に問い合わせして下さい。また、駐車場は国道20号から八王子駅に向かって地下にあります。会費は300円

・問い合わせ: 永井信子

9

○山梨県北杜市での集会

・日時: 8月1日(金)午前10時~12時

・場所: 山口清三宅

電話0551-321026

・問い合わせ: 加茂悦爾

○長野県伊那市での集会

・日時: 8月1日(金)午後3時~5時

・場所: 有賀進宅

○長野県下伊那郡での集会

・日時: 8月2日(土)午前10時~12時

・場所、問い合わせ: 松下道子宅

○岐阜県恵那市

・日時: 8月3日(日)午前1

0時30分~12時

・場所、問い合わせ: 石原潔宅。

○聖書講話シリーズイザヤ書

イザヤ書聖書講話CDが完成しましたのでお知らせします。全3巻、価格は、2000円(送料込)全137講話、約67時間35分)

・この聖書講話を聴くためには、パソコンまたは、MP3やWMA型式のファイル対応のプレーヤが必要です。最も安価でかつ取り扱いも便利、枕元でも台所でも使えるのは、ソニーから発売されている、CDラジオ(NS-E20CB)です。これは、MP3やWMA型式のいずれであっても聞くことができます。

今まで、私たちのキリスト集會や県外の多くの方々が用いておられます。

近くに電器店がない、インターネットでは購入できないという方は、吉村宛てに申込すれば、お送りします。価格は、4500円です。(送料込)なお、インターネットでは、価格が常に変動しています。以前より現在は値上がりしています。

徳島聖書キリスト集會案内

・場所は、徳島市南田宮二丁目一の47

徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一)主日礼拝 毎日曜午前10時30分

(二)夕拝 毎日曜、第3火曜、夜7時30分から。毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のいのちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅)です。

第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の会、第二水曜日午後一時からの集會が集會場にて。また家庭集會は、板野郡北島町の戸川宅(第2、第4の月曜日午後一時よりと第二水曜日夜七時三十分より)

・海陽集會、海部郡海陽町の讃美堂・

数度宅 第二火曜日午前10時より、

・いのちのさと集會: 徳島市国府町

(毎月第一、第三木曜日午後七時三十

分)

・海陽集會、海部郡海陽町の讃美堂・

数度宅 第二火曜日午前10時より、

・いのちのさと集會: 徳島市国府町

(毎月第一、第三木曜日午後七時三十

分)

・海陽集會、海部郡海陽町の讃美堂・

数度宅 第二火曜日午前10時より、

・いのちのさと集會: 徳島市国府町

(毎月第一、第三木曜日午後七時三十

著者・発行人 吉村孝雄 〒777-0101 小松島市中田町字西山九の一四 電話 050-1163-4962 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)

郵便振替口座 ○一六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は 郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。

(これは、いずれも郵便局で扱っています。) E-mail: pistis7ty@hotmail.com http://pistis.jp FAX 0885-32-3017